

## Didi と日本のタクシーについての考察

齋藤 正幹

太原の春は、30度を超す夏日や-1度になる日もあり、着る洋服を選ぶのにも一苦労しています。今回のレポートでは、中国のシェアライド（相乗り）アプリ「Didi」の紹介と、Didi が発展した理由について考察したいと思います。

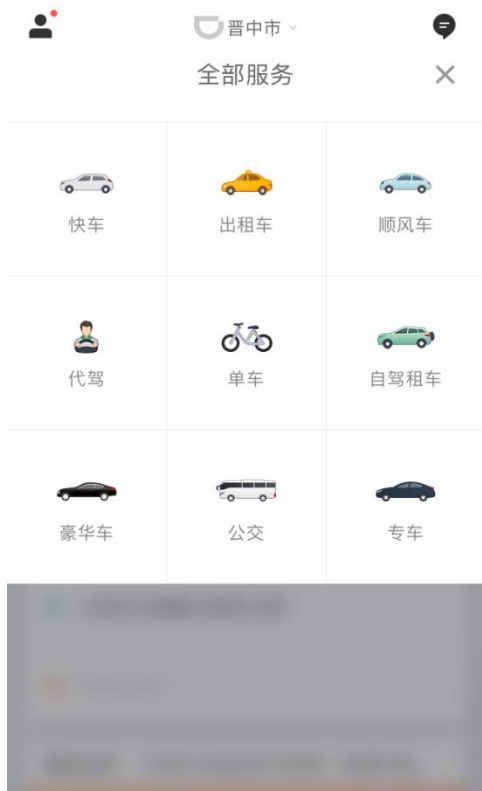
まず、太原市内のタクシー事情について紹介します。太原のタクシーは初乗り8円で、時間と距離によって徐々に増えていく形式をとっており、日本のタクシーと何ら変わりはありません。太原市のタクシーは青色で、すべて電気自動車です。大気汚染防止に力を入れているとはいえ、非常に先進的な取り組みであると感じています。充電場はオーバブリッジの下に設置してあることが多く、太原に向かうバスの中から見かけることが多くあります。メーカーは全て「BYD」という会社で、噂によると車体は群馬県で製造されているものを使っているようです。支払いには、お決まりの WeChat pay か Alipay が採用されています。印刷されてラミネート加工されている QR コードを運転手から提示してもらい、スキャンして支払います。

様々な良い点があるタクシーですが「太原市外には行ってくれない」という悪い点があります。特に私たちが住んでいる山西大学商務学院は晋中市（太原の隣の市）に位置しているため、19時半の最終バスを逃すと帰宅の足が無くなってしまいます。Didi を知る以前は運転手と交渉し通常の倍の値段で帰っていました。

日本ではシェアライドが導入されていませんが、公共交通機関の維持が危うい地方都市では高齢者の移動手段になったり、徐々に広がっている「副業」として仕事をするのが出来たりするのではないかと考えています。東京近郊である埼玉の南部では比較的交通機関が整備されていますが、埼玉県北部や西部など公共交通機関へのアクセスが遠い場所では相乗りによる移動手段があってもいいのではないかと思います。

報道によれば、タクシー業界による反発からタクシー配車アプリの開発や共同資本による経営が見られます。しかし、今後2020年の東京オリンピックを迎えるにあたって「高級感」や「高品質なサービス」の提供に焦点を絞るだけではなく「単なる移動手段」としてのタクシーも視野に入れたほうがいいのではないかと考えます。Didi では現在地と行先だけを入力し、適切なルートで連れて行ってくれるためドライバーにより故意に遠回りすることはありません。日本に来る外国人の方の中には日本語が不自由な方も少なくないのではないのでしょうか。タクシードライバーの語学力向上や翻訳アプリの導入もされていますが、現在地と目的地を入力すれば事前に価格を提示してくれて勝手に連れて行ってくれるシェアライドに軍配が上がるのではないかと思います。

中国に長期間滞在される方がいらっしゃいましたら、ぜひ Didi を使ってみてください。



Didi では、様々な車を選ぶことができます



アリペイと直結しているので、支払いも便利です



経路と価格が表示されます。  
(経路は商务学院から山西大学まで)